

大森山動物園ミルヴェは、これまで子ども達の豊かな心を育みながら、楽しいレクリエーションの場を提供してきました。開園から30数年が経過し、大森山動物園を秋田の情報発信地のひとつとして、さらには、地域活性化の一翼を担えるように、新たな大森山動物園の夢づくりを進めたいと考えています。

そのため、平成19年11月23日、動物園界の代表者、自然環境や経済の専門家、子育て中のお母さんなど、多彩な顔ぶれの方々を迎え、シンポジウムを開催しました。

## プログラム

- 13:00~13:10 ● 挨拶  
秋田市長 佐竹 敬久  
秋田大学学長 三浦 亮
- 13:10~13:40 ● 基本課題提起「秋田の動物園が目指すもの」  
秋田市大森山動物園長 小松 守
- 13:40~16:00 ● 各シンポジストからの提言
- 16:00~16:10 ● (休憩)
- 16:10~17:00 ● ディスカッション・まとめ

## コーディネーター



### 西木 正明

日本ペンクラブ常務理事 (環境委員会)  
秋田ヒューマンクラブ会長  
作家

今日の動物園には、たくさんの役割が求められている。大森山動物園が掲げる「動物との対話」は非常に重要なコンセプトであるし、種の保全や環境保全の面で果たすべき役割も重要である。

アフリカでの戦争や内戦では、カバやゴリラなどの野生動物が大きな被害を受けた。人間の争いや営みが、野生動物や環境に重大な影響を及ぼしており、「動物の最大の天敵は人間」であるばかりでなく、「人間の最大の天敵は人間である」ともいえる状況にもなっている。こうした中で、動物や自然(環境)との共生に動物園がどのように関わっていくのかが問われているとも言える。

もちろん、現代の動物園はこうした時代の変化を敏感に感じ取り、大きく変わりつつある。旭山動物園の成功も、決して「アイデア勝負」ではなく、「動物園でなければ出来ないことをやる」という確固たる理念に基づいている。多くの人にそうした変化を感じ取ってもらいたいし、そのためにも実際に動物園に足を運んでもらいたい。

1940年生まれ。秋田県仙北郡西木村出身。秋田高校を1959年卒業、早稲田大学教育学部中退の後、平凡出版(現・マガジンハウス)に13年余り在職、1980年に退職し、作家活動に入る。デビュー作『オホーツク謀報船』(角川書店刊)で1980年第7回日本ノンフィクション賞新人賞受賞。1988年『凍れる瞳』『端島の女』(文芸春秋刊)で第99回直木賞受賞。1995年『夢幻の山旅』(中央公論刊)で第14回新田次郎文学賞受賞。2000年『夢顔さんによろしく』(文芸春秋刊)で第7回柴田錬三郎賞受賞。大宅壮一ノンフィクション賞・日本推理作家協会賞・オール読物推理新人賞・植村直巳冒険大賞・さきがけ文学賞等の選考委員。  
日本ペンクラブ獄中作家委員会および平和委員会委員。NHK国際放送審議会委員・国土庁審議会専門委員・秋田県総合開発審議会委員・海上保安庁アドバイザー・内閣府生活達人委員会委員・日本文学振興会評議員などを歴任。